

初年次教育の充実を目指して

永田 武

(広島工業大学 情報学部長)

一 はじめに

広島工業大学(以下、本学)は広島市佐伯区の瀬戸内海を見下ろす閑静で自然豊かな恵まれた環境の中に位置している。本学は、昭和三八年に「教育は愛なり」を建学の精神として工学部電子工学科と電気工学科を開設し、その後、学科の増設を行い、平成五年には社会のニーズを先取りし我が国最初の環境学部を、平成一八年には情報学部を開設した。現在、三学部一二学科を有する学部生四三〇〇名程度の技術系大学である。

本学の教育方針は「常に神と共に歩み、社会に奉仕する」

である。筆者が本学に赴任し初めてこの教育方針にふれた時、技術系大学の教育方針としてはなんとなく違和感を覚えたことを記憶しているが、最近の新任教員も同様の感想を持つようである。しかし、多くの卒業生からはこの教育方針の持つ奥深い意味について、年齢を重ねるにつれ明らかにになってきたとの話がよく耳に入る。

本学では茂里一絃学長のリーダーシップのもとに「教育改革18」がスタートし三年目を迎えている。この改革では、教職員全員が本学の建学の精神と教育方針の原点に立ち戻り、「新しいカタチ」の教育プログラムの再構築が実施された。教育方針についても、「常に神と共に歩み」を「自

然に對する畏敬と環境の重視」に、「社会に奉仕する」を「高い倫理と社会とのかわりを重視する」と理解することによって、「社会・環境・倫理」を教育目標キーワードとして私学らしい教育を目指すことになった。

さて、本学でも近年、多様な履修歴を持つ新入生の教育に際して、他大学と同様に様々な問題が顕在化している。そこで本稿では、これまでに高校生から大学生への転換を図るために本学で実施されてきた「初年次教育」の教育プログラムと、現在検討が行われている体系的な初年次教育の概要について述べる。

二 初年次教育の現状

(一) 概要

本学の初年次教育関連の教育プログラムを図1に示す。同図に示すように、本学の初年次教育は「入学前教育」と「初年次教育」から構成される。そして、チューターや学生指導担当教員が学生個別のきめ細かい対応を行うようになっている。ここで、「学生指導担当教員」とは原則として科目を担当せず学生指導や学生相談を行う専任教員である。

(二) HIT教育機構

図2にHIT教育機構の組織図を示す。HIT教育機構は、教育方法の研究・調査を行い、学生が本学で学ぶ喜びを実感してもらえる教育環境を構築するために必要な提案と提言を行うことを目的としている。同図に示すように六つの部門と三つのセンターおよび支援室で構成されている。入学前教育を担当するのが「学生受入・接続教育部門」、初年次教育を担当するのが「教育内容・方法研究開発部門」である。

(三) 入学前教育

AO入試入学者を対象に一〇月〜一月の間、各学科の専門テーマ・英語・数学・物理を提供した通信指導を行う「Letter & Brush-up」と、推薦入学者を対象に二月〜三月の間、英語・数学・物理を提供し、本学と地方会場による対面指導と通信指導からなる「入学前セミナー」を展開している。このセミナーの受講は任意とし、受講しない生徒にオリジナルテキストを送付し自学自習を勧めている。

(四) オリエンテーション・ゼミナール(オリ・ゼミ)

各系では、入学式以降の学部・系で実施されるオリエン

また、教育改革18以降の一年次教育は、学科ではなく系として実施されている。この系教育は、例えば電気や電子などの関連する学科を電気系として束ね、両学科の教員が共同で教育する仕組みとなっている。以下、特徴的な内容について紹介する。

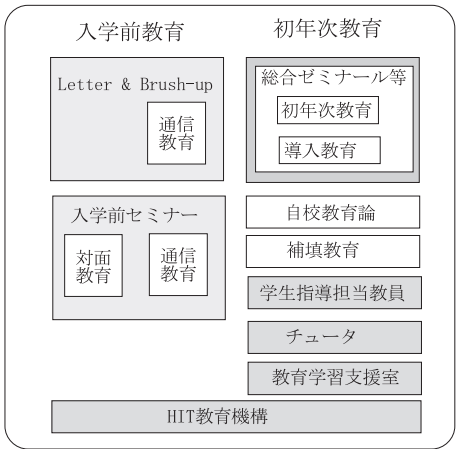


図1 本学の初年次教育

テーションに引き続き、なるべく早い週末を利用して全教員が参加する一泊二日のオリ・ゼミを実施している。ここでは、新しい友人づくりを促すような企画が教員ならびに同行する学生団体によりなされている。

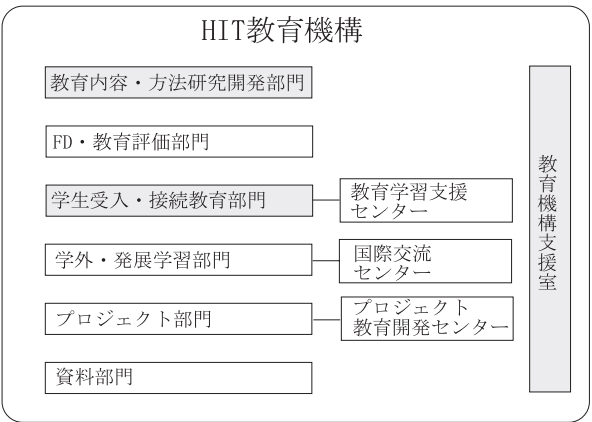


図2 HIT教育機構の組織図

(五) 初年次教育としての総合ゼミナール
 各系では新入学生を対象とした「総合ゼミナール」が開講されている。環境学部社会環境系（環境デザイン学科・地域環境学科）では、スタディスキルの九つの力（聴く、読む、調べる、整理する、まとめる、書く、表現する、伝える、考える）についての内容が「総合ゼミナール」として全教員により全面的に実施されている（一教員あたりの学生数二二〇名）。また、工学部建設系（都市建設工学科・建築工学科）では、全面的ではないが初年次教育と専門への動機付け教育を九名の教員で実施している（一教員あたりの学生数二二一名）。しかし、他の五つの系では専門への導入教育が主体となっており、全学的な初年次教育は現状では実施されていない。また、環境学部の担当教員からは、初年次教育の教育効果を上げるためには少人数教育が必要であるとの意見が上がっている。

(六) 自校教育論

建学の精神や教育目標を伝える「自校教育論」は、総長、副総長、学長らにより開学当初から全学で実施されている。最近では、卒業生も特別講師として加わり、先輩または社人として、学生にとって貴重な内容を伝えて頂いている。



図3 学習管理システム（出席管理機能）

講義終了後の学生のアンケートによれば、ほとんどの学生から「非常に有意義であった」と肯定的な評価が得られている。

(七) 教育学習支援センター

多様な履修歴に対応するために、平成一五年に開設された「教育学習支援センター」には、専任教員が常駐し、英語・数学・物理の指導を行っている。昨年度の利用者数は延べ四二二三名であり、本学の「補填教育」として定着した感がある。しかし、教育学習支援センターを訪問できない学生に対する支援の必要性が指摘されている。

三 情報学部での取組

(一) 学習管理システムの活用

情報学部では学生全員がノートパソコンを使用する教育が行われており、出欠管理もノートパソコンで実施されている。図3がその画面例である。学生と教員はいつでも履修状況を確認できるようになっている。これまでは、担当する科目以外の履修状況の把握が困難であったが本システムを利用することできめ細かい指導が可能になった。

(二) 情報系学生指導担当教員

前述の学生指導担当教員は、定員数の多い系に配置されている。その目的は、学生生活上の問題点を早期にキャッチし、個別対応により退学者を減少させることである。情報系の学生指導担当教員は、前述の学習管理システムを管理し、問題のある学生の対応をチューターと連携して実施し、効果を上げている。

(三) チューター制度の改善

これまで本学では教員の負担軽減の面からチューターの人数は、一〜二年で四名、三年で二名、四年で一名のように運用されてきた。しかし、きめ細かい対応を目的に情報系では開設当初から、一〜二年は教員全員でチューターを担当することにした。一教員あたりの学生数は一〇名程度となり、密度の濃い指導がなされている。

(四) 系教育の充実

系教育では二学科の教員が共同で授業運営に当たっている。特に、プログラミングやアルゴリズムなどの情報系基礎科目については、六分割し一教員あたり四〇名程度の学生を指導している。また、これらの科目はクオータ科目と

し、一週間に二回のペースで四分の一期で完結する形式をとっている。当初、学生が授業の進度についていけるかどうかの懸念があったが、学生アンケートの結果、否定的な回答をした学生は二割程度であった。その理由は、「進度が速すぎる」や「課題が多すぎる」のような授業運営に関するものが主であった。一方、「もう少し速くしてもよい」のような意見もあり、学生間のバラツキの幅が非常に大きいことがわかる。学生個別の対応を強化する必要があるため、平成二〇年度は担当教員を増加することにした。

(五) 一年次末での学科選択

本学の入試制度により、新入生は学科入学生と系入学生が混在している。系入学生は、一年次末に学科を選択することになる。また、一年次の系教育により、学生は二学科の教員を知ることになる。この間、学科入学生も自分の将来にとって相応しい学科に転学科することを従来よりも容易にしている。情報系の場合、昨年度の実績では、系入学生は情報工学科と知的情報システム学科を四対六で選択し、転学科の希望者はそれぞれ二名と七名の合計九名であった。面接により転学科の動機を確認しているが、いずれも将来の進みたい方向性を明確に検討した上での判断となってお

表1 情報学部情報系の初年次教育科目例 (短期的対応)

No	内 容
1	ガイダンス・ST-01(A) スタディスキル養成講座1 (スタディスキルとは)
2	SO-01 ソーシャルスキル養成講座1 (自己発見レポートの実施)
3	ST-01(B) スタディスキル養成講座2 (ノート・テイキング)
4	SO-02 ソーシャルスキル養成講座2 (自己発見レポートの結果検証)
5	カウンセリング講演会
6	ST-02(A) スタディスキル養成講座2 (ノートテイキング)
7	ST-02(B) スタディスキル養成講座2 (ノートテイキング)
8	ST-03 スタディスキル養成講座5 (アカデミックライティングの基本スキル)
9	CS-01 情報工学分野1
10	CS-02 情報工学分野2
11	CS-03 情報工学分野3
12	IS-01 知的情報分野1
13	IS-02 知的情報分野2
14	IS-03 知的情報分野3
15	まとめ

(二) 短期的対応 (ステップ1)

本学における環境学部と工学部の先行事例にならない、情報学部でも平成二〇年度に現行の「総合セミナー」などの一年次開講科目を利用して「スタディスキル」と「ソーシャルスキル」を取り入れた教育内容の改善を実施する予定である。表1は、情報学部情報系で実施する予定の教育プログラムの例である。同表に示すように情報系では三つの「スタディスキル」と二つの「ソーシャルスキル」を提供している。この中で、自己発見レポートは自分を充

り、安易な転学科の希望は現在のところ出ていないようである。

四 初年次教育の充実に向けて

(一) 特別委員会

現在、「学習・学生生活の充実方策に関する検討特別委員会」において、新しい教育内容・方法の検討が進んでいる。その中で「体系的な初年次教育としてのカリキュラム」を検討するワーキンググループ(WG1)が立ち上がり、検討が進められている。WG1では、初年次教育の学習目標を、①自律的学習方法の確立②社会的倫理観の確立と定め、体系的な教育プログラムの検討を進めている。各学科での開講単位数は一八六(二〇六単位)となっており、全学的に初年次教育のための新たな科目を導入することは困難が予想されるため、中間報告によると、短期的対応と中期の対応の二つのステップで「スタディスキル」、「スチューデントスキル」、および「ソーシャルスキル」を融合した教育プログラムを開発する方向性が示されている。

実した大学生活を送るヒントを自ら考えさせることに主眼をおき、将来なりたい自分に近づくための目標と計画をつくらせるものである。

(三) 中期的対応 (ステップ2)

教育改革18の完成年度の平成二二年度中に本学における体系的な初年次教育の教育プログラムを完成させる予定である。本学の教育目標のキーワード「社会・環境・倫理」は、教育プログラムの中で明確に展開されなければならないとの認識

のもとに、初年次教育の教育目標を①「自律的学習方法の確立」と②「社会的倫理観の確立」としている。①は、『心身とも健全にして己を制御し、「常に神と共に歩み社会に奉仕する」人間教育が本学の教育方針である』という教育方針の前段階にかかわる内容を集約したもので、高校生の受身的な姿勢から大学生の能動的な姿勢への移行を実現するものである。この姿勢の移行が、スタディスキルに対応する部分である。一方、②は教育方針の後段階にかかわる内容を集約したものである。教育改革18では、「常に神

と共に歩み」を「自然に対する畏敬と環境の重視」に、「社会に奉仕する」を「高い倫理と社会とのかわりを重視する」と理解している。また、広島工業大学環境憲章の宣言に掲げられている「地球を宇宙規模で捉え、自然本来の生態系を守るという原点を忘れず、人間の叡智をもって、自然と人類の好ましい共存を切に願ひ、人類が一丸となって環境の保全に邁進する」とも通じる考え方である。これは、中央教育審議会大学審議会大学分科会の報告（平成一九年九月）における「学士力」の中の「態度・志向性」に対応する部分であり、初年次教育だけで達成できるものではなく四年間の学士教育により醸成される能力である。このような能力を身に付けるには、まず初年次において種をまくことが重要である。WG1では幾つかの案が上がっており、現在、実行の可能性と期待される効果についての検討を実施中である。

五 おわりに

初年次教育は、多くの大学で取組が積極的に進んでおり、特に総合大学や文系の大学において数多くの魅力的なプログラムが開発されている。推薦入学者を数多く抱える大学

においては、今後初年次教育の重要性がますます高まることが容易に予想できる。

本稿では、初年次教育と対をなす「補填教育」について言及しなかったが、英語・数学・物理の学力レベルの差を早期に解消することも必要である。本学では、教育学習支援センターを中心に補填教育を展開しており、専門高校出身者を中心に利用者が増加傾向にある。一方、情報学部では普通科出身者から情報系基礎教育に対するバックアップ体制の充実についての要望が寄せられるようになってきている。これは、初年次にクォータ制によりプログラミングなどの情報基礎教育を集中させているためであると考えられる。このように各大学の実情に合わせた教育プログラムの開発が必要である。大学生としての自覚を持たせる初年次教育と、学力レベルを確保する補填教育が両輪となって機能した時に初めて学士課程教育の改善が図られると考えられる。